街にて

吉江久彌

オルガンの時報旋律空に消えてわが始めての町朝あたらしき
置き渡す自転車光り朝闌(た)けし終着駅に人まばらなる
横断路渡り行くとき真向かひ来る人に戦ひの形相も見つ
車うごく十字路小さく見下ろして己(おのれ)を神と思ひてもみる
弥生期の貝塚に牡蠣殻出づといふ幾世紀かありて今われ牡蠣を食ふ
ほろほろと箸よりこぼし食ふ老婆目の前にありて我が疲れをり
軟らかき固き幾千の味通りけむ我れの喉(のみと)を思へばたゞならず

わが顔を映せば見入り飾窓（ショウウインドウ）の前にひそかにしまらくも佇（た）つ

展示窓の「美味求真」の「真」は何こだはりながら寺町くだる

身の丈（たけ）の何時よりも低き心地して石垣沿ひを疲れて歩む

くろぐろと枯草濡らす昼の雨遠き町に吾子いま飯食ひをらむ

梅雨空の光ひそかに地にありてあぢさゐの青となりにたらずや

エキゾチズムを逐ひし彼の日も淡々（あは）とその過去すらに憧れに似る

夕暗くなりつつ西の霽れゆくか雲動く下に鎗屋町あり

くれなゐの夕雲遠き街の果てへ赤信号灯のつぎつぎ点（とも）る

漂へるものはいとほし今日もかもこの人の世の街を人行く

（よしえ　ひさや　文学部教授）